

H2/9/30

読売新聞 29面 福井

放談

原子力利用

福井への付き合ひは、結構古くしてすわ。

初めて福井へ行ったのは、大学にいた時に、県の方は八一年に起きた日本原子力発電所原発の放射性汚染事故の時。残念ですが、あつた調ひで、原子力を地域に抱えて真面目にいた作業員の方が「被曝に取組むつもりな勢が燃した」と訴訟を起され「地方が原子力を見る時代」という持論を美談で見るモデルケースだと直感しました。

——今その評価は変わりましたね。

——それから、地元の連合青年団の人たちに懇話会として、お酒を飲みながら、原子力についてワイワイやりました。

——エネルギー研究センターとかかわり始めたのりた、と。

原子力利用

藤家 洋一さん

一九三五年生まれ。名古屋大学工学部教授、東京工業大学工学部教授、九五年から原子力委員会委員。「もんじゅ」事故を受けて設置された原子力政策田舎会議には毎回出席し、積極的に発言している。

地域活性化へ期待大



エネルギー研究センターについて話す藤家さん

医療への応用／国際交流

「これは、もう限られた職員しかいない国だけがやるのは苦しい。そういう意味でもエネ研のこれから大いに期待したいですね。」

「ええ。できればエネ研には、原子力に関する情報発信基地にもなっています。どんな情報をも提供するのは難しい問題ですが、もんじゅ事故でも問題になったように、「安全を安心に」なびの」ための情報提供はこれからますます大事になっていきます。」

基礎的な福井県のそういう気持で、たまたま、この方法のほほほ。ちゅうじゅうじゅうの意見が始まって、原子力は光、荷電線、中性子、と三つの使われ方をしている。この中の何を選び出して、地域の特性を踏まえて、設の活用方法を考え、それがらんなって活用していかののか。そこに原子力と地域活性化との接点が生まれる。

——夢の持てる事業」だ。

中核設備となる加速器を利用した地場産業向けの技術開発や、がん治療などの医療分野への応用など。研究したい。アイデアをどんどん出してほしい。「エネ研をどうしようものにしたら、地域が活気いへ。東京との交流を、環日本海の地域の技術者との国際交流にもつながっていくんじゃないか。」

——県には「エネ研の育成にも国が直接タッチするべき」との不満の声もあるが、やはりそれは地元の人々が主体的にやってもいい。

「これからの施設とも連携して、原子力の平和利用にかかわる重層的なネットワークを形成しては、エネ研は、そのセンターになるんじゃないか。」

「若狭には、動力炉・核燃料開発事業団の新型転換炉「ゆげん」を初め、ろんなタイプの原発がある。関西電力も原子力安全システム研究所を美浜町に移転させている。」

「施設の利用法を考えると、いい。地域及び国際的なネットワーク運営を目指すには、柔らかな民間の発想の方が向いていますから。」

——期待度は相当なものです。

「行政は余り直接におわり触れないほうがいいです。運営を第三セクター方式の財団法人にした理由もそこにある。財団の企画委員会など、エネ研を練って、施設の活用方法を考えるといいです。運営を第三セクター方式の財団法人にした理由もそこにある。財団の企画委員会など、エネ研を練って、施設の活用方法を考えるといいです。」